

厚木稲門会だより

発行： 早稲田大学厚木稲門会
事務局 神奈川県厚木市船子607-8
(株)すまいる内
Tel/Fax 046-296-6006

発行人：吉成征一 編集人：鈴木清一

平成26年度 定期総会開く 講演会・懇親会も盛大

会長あいさつ

吉成 征一 (昭35文)

厚木稲門

会は昭和51年、作家の和田傳氏を初代会長として発足。以来38年が経過しまし



た。その間、母校早稲田大学と同校友会、県下各支部の稲門会、又本年創立20周年を迎えられた慶応厚木三田会等、関係各位には多大なご支援・ご協力を戴いて参りました。厚く御礼申し上げます。

厚木稲門会の会員数は現在250名余で、会員増強が目下の急務であります。そのためにも、役員一同、関係各位のご指導を戴きながら、地域社会の発展に寄与することを視野に、今までに培ってきた同好会活動やボランティア活動の一層の充実と活性化を目指し、会員相互の交流と親睦を図って行きたいと念願しています。

平成26年度の総会・講演会・懇親会が10月18日(土) レンブラントホテル厚木にて開催された。天候に恵まれたこの日、総会には会員50人が出席、江原副幹事長の司会で定刻午後3時に始まった。吉成会長の挨拶の後、恒例により会長が議長に選出され、報告事項・平成25年度活動の概況報告及び分科会活動報告を伊保幹事長が行なった。会員の異動については、年度当初279人で、入会者が11人、退会者が100人で総会時現在会員数は190人。

査報告で東方会計と高坂監事から説明があり承認された。審議事項は平成26年度活動計画で伊保幹事長から俳句会を投句形式にして、新たな同好会として麻雀や面白い話を聞くサロンを検討しているなどの説明があった。

10分間の休憩の後、講演会が行なわれ、一般参加を含めた聴衆が静かに拝聴した。(詳細は別掲)

会場を移し懇親会となった。会員と来賓はそれぞれ指定された円卓に8人ぐらいつつ一緒に着席。午後5時に吉成会長の挨拶で幕を開け、来賓25人の紹介、早稲田大学高橋地域コーディネーターと慶応厚木三田会高橋会長の来賓代表挨拶を受け、横浜稲門会川崎筆頭副会長の音頭で乾杯、歓談に入った。初参加者5人の紹介、恒例の抽選会の後、「都の西北」を斉唱し、柏木副会長の閉会の挨拶で幕を閉じた。(S50商 小澤秀通)

入会者を募るため30歳から70歳までの未入会者1,500人にダイレクトメールを発送した。退会者のうち逝去が6人、高齢等が5人。会費3年以上未納者に督促状を出したが20名は行方不明で戻って来てしまい、69人は会費の納入がないため、昨年度の会則改正に基づき89人が退会となった。

承認事項は会計報告及び会計監

講演会 『グローバル時代の私の隣人』

皇學館大學名誉教授 松本基子氏 (昭30年文)



今年の講師は、皇學館大學名誉教授、松本基子さんです。元大和難民定住促進センターの所長としてだけでなく、インドシナ難民や外国籍の人々との関わりを長く持ってこられました。彼らと私達の関係の過去・現在、今後の課題に言及されました。

その受け入れ態勢は日本の経済状況などによって左右され、移住後の環境の変化の中での一番の被害者は、アイデンティティの確立が困難だった子供であったという。

彼らを必要としている現状でありながら移住のハードル(言語の壁など)を高くし、世界の人材争奪戦の中で後れを取るようになっている。かつて、高賃金を求めてやってきた外国人労働者は変わり、彼らが行きたい国を選ぶ時代になったのだという。

日本が外国人受け入れ対象としてきたのが労働者、技術者であった歴史的背景から、ベトナム戦争後急激に増えた難民、移民もやはり労働力として受け入れてきた。

“日本の事は日本人で賄えない”という現実の中で、私たちは彼らとどのように付き合うのか。単なる労働者としてか、人口減抑制のための住民か、異文化の中で育った人との相互理解と他文化の多様性を受け入れる豊かな思想の社会の構築が課題であるとした。

(S41文 堀 美知子)